

「感性価値創造への挑戦」

パナソニックホールディングス株式会社 参与
ジャズピアニスト

小川 理子

転載禁止

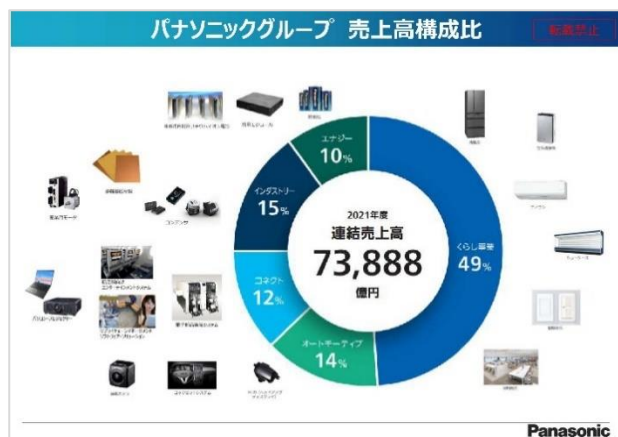
本日の内容

1. イントロ（当社概要、自己紹介、当社の使命）
2. 感性価値を創造する
3. 本業を通じて社会課題を解決する
4. 大阪関西万博にむけて

～いのち輝く未来社会のデザイン～

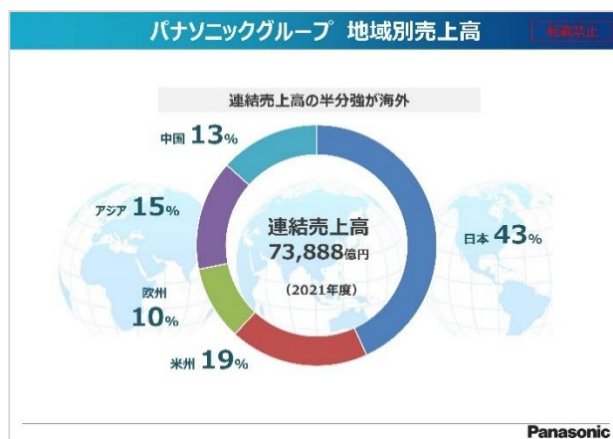
Panasonic

パナソニックホールディングスの小川と申します。万博まであと2年ということで、当社のパビリオンも着工が始まりますが、具体的な内容をお伝えできる迄には至っていませんので、本日は当社の万博で示したいコンセプト、考え方、伝えたいメッセージなどを、私のこれまで会社で経験してきたことと合わせてお話ししたいと思います。



パナソニックグループの事業内容ですが、暮らしに関する事業が半分を占めます。私が長年担当してきた家電や、今欧州で成長している Air To Water という暖房機器などもこの中に

入ります。次に車に関するオートモーティブ事業、今私はマツダの社外取締役も務めています。車は100年来の大激動時代になっており、カーボンニュートラルに向けてモビリティ社会をどのように形成していくかを必死に議論しています。あとコネクテッド、インダストリーなどの BtoB 事業、そして水素燃料電池や蓄電池、乾電池などのエナジー事業など多様に事業を展開しており、海外売上が半分以上占めるグローバル企業です。



自己紹介

転載禁止

テクノロジー

音響研究がバックボーン
サイエンスとアートの融合

ビジネス

事業責任者
技術責任者

アート

ジャズピアノ

Technics

Mazda

日本ガーテオ協会

大切にしている言葉

自然の理

Panasonic

自己紹介をさせていただきます。今パナソニックでは、「BTC（ビジネス・テクノロジー・クリエイティブ）」がキーワードと

っており、この3つの視点から、多様な人材が一つになりイノベーションを創出する動きを全社的に行っています。私も元々技術者として入社し、音響技術・音響研究がバックボーンとなっています。当時からサイエンスとアートを融合させるのが私の夢であり、ずっとそれを追いかけてきました。ビジネスでは直近では家電事業の CTO やテクニクス事業の責任者として、変化の激しい環境のもと、事業をどのように持続可能にしていくなかで日々頭を悩ませているところです。クリエイティブというところでは、社内には多くのデザイナーやクリエイターがいますが、私の場合はジャズピアノですので即興演奏などがクリエイティブな活動だと思いますが、仕事へとても良い影響を与えています。

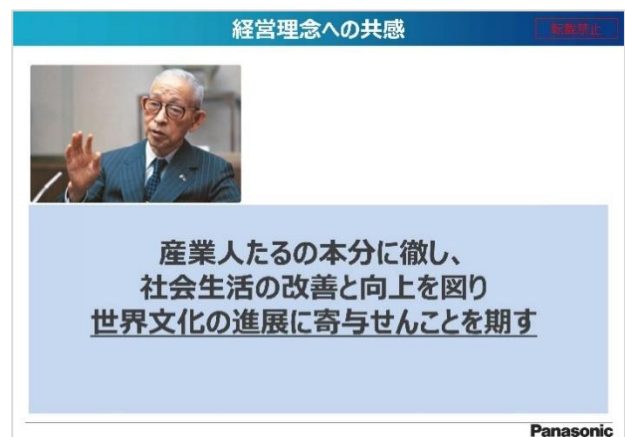
そして、「自然の理」という言葉を私は大事にしており、自然体でいることが一番自分の力を発揮できていると思っています。野球の大谷選手が WBC で全精力まずにもの凄いホームランを打っていましたが、あのような自然体でいるのが人間として一番いいのだろうなと見ておりました。



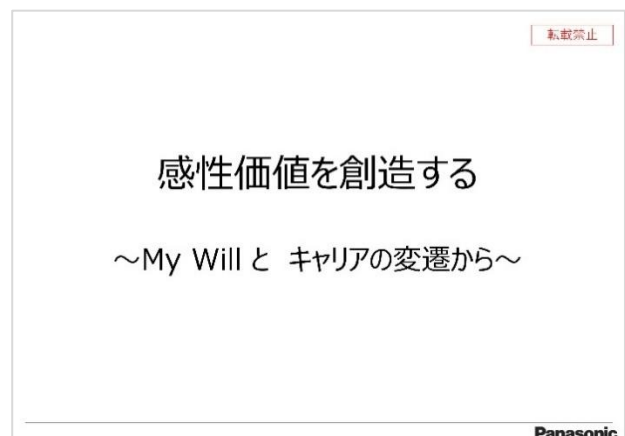
私は 1986 年に入社以降ずっと同じパナソニックにいますが、全く異なる仕事をいろいろ経験しましたので、3 つか4つの会社で働いたような感覚を持っています。

最初の 15 年間は音響研究がメインで、マルチメディアやデジタル DVD の大容量高音質研究に従事しましたが、バブル崩壊や事業ポートフォリオの変化により、結局組織は解散しました。好きだった音響の仕事ができなくなり、ネット事業へ移りました。ネットワークが普及して暮らしの中へ浸透していくとする時代で面白い仕事でしたが、パナソニックはものづくりの会社でネット事業への理解が進まず、例えばテレビや DVD レコーダーへネットを繋げると言っても、そのようなことはコスト高

で要らないと冷たくあしらわれる時代でした。いろいろ挑戦しましたが、結局組織はバラバラになりました。次に CSR・社会貢献の部署へ行きました。ここで企業が広く深く社会とコミュニケーションしている、それもものづくり以外の分野で活発に行っていることを初めて知りました。従業員の私が、企業の美徳を知らないのはダメなことだと思い、なぜ従業員や社会へ知られていないのかと考え、本業で社会課題を解決するということを積極的に発信し、たくさんのプロジェクトをスタートさせました。その後オーディオのテクニクスブランド復活というオファーを受け、音響事業に戻りました。頑張ってきたら、好きな仕事へのチャンスが巡ってきた。これはもう私の使命だと感じました。その後に家電技術の責任者になり、キャリア最後の仕事として万博の仕事を受け持つこととなりました。これも、これまでの全ての経験がつながって辿り着いた自分の使命かと、今までのキャリアを振り返り感じています。



これがパナソニックの全社員が経営理念として礎とする言葉です。このうち「世界文化の進展に寄与する」という部分へ新入社員時代にとっても共感し、この先の明るい未来を感じていたように思います。

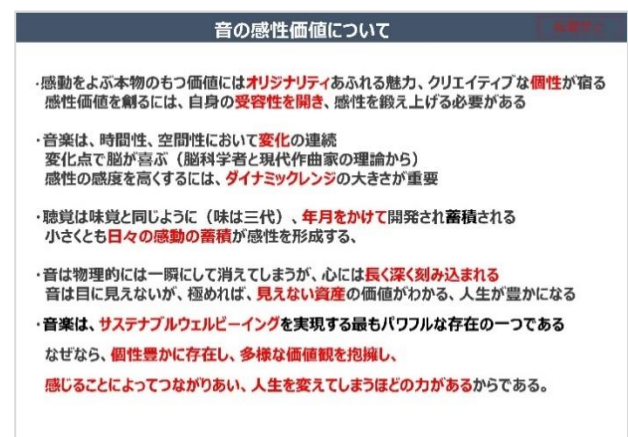




さて、ここから「感性価値を創造する」の話へ入ります。私は1986年の入社時、音を感じるというところをビジネスにしたいと考えていました。しかし当時は機能や性能など売上と利益に結びつく、全ては数字やエビデンスとして、論理で語らなければなりません。勿論ビジネスであり論理は重要ですが、音楽や音は、論理や数値だけでは表現できないところへぶつかってしまいました。音が持つこの感性の価値というものを、いつか時代が気づく時が来るのではないかと、その時まで諦めずにやっていこうとして、感じて考え、作ってまた感じてということを繰り返していました。最初に私が担当したのが、左側の写真にあるスピーカーです。楽器のような形状で奇抜すぎて売上には繋がらなかったですが、ニューヨーク近代美術館の永久展示品にいただきました。右側写真の中央にある青色の2つは、2m×2m 厚さ5cmの世界初最大の振動板スピーカーで、コンサートホールと同じような空気の揺らぎを再現するコンセプトで開発したものです。楽器やコンサートホールの揺らぎなど、これまでの機能や性能と関係がない発想からこのようなチャレンジをさせていただきました。

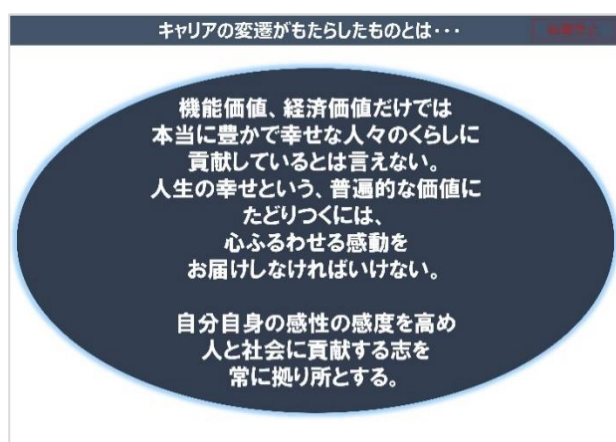


しかし、バブル崩壊が起こり 1993 年このプロジェクトも解散しました。私も会社を辞めなければいけないかなと思っていたところ、当時ジャズドラマーであった上司に声をかけていただき、ジャズ演奏を再開したことが今につながっています。細々とジャズ演奏を続けていき、そこからいろいろな世界が広がり、音楽と仕事の二足のわらじと言われました。上の写真は、アメリカの大リーグ級のプロジャズミュージシャンたちと一緒に録音させていただき、それがイギリスのジャズジャーナルインターナショナルの批評家投票で 1 位となったもので、そこからチャンスが大きく広がったという感じでした。下の写真は、私の音楽における CSR 社会貢献活動の様子です。左側はアフリカの女性たちが HIV 感染を予防するための募金活動をワールドツアーしており、日本に来られた時にゴスペルとジャズで演奏しました。真ん中はアフリカにソーラーのソリューションを持って行った時に、ピアノでアフリカの歌・音楽を演奏すると、3000 人ぐらいの村人たちが一緒に歌ってくれた経験をしました。右側は日本とトルコの友好 120 周年の時にイスタンブールジャズフェスティバルに出演したものです。自分の音楽でも、このような機会をたくさんいただけてきました。

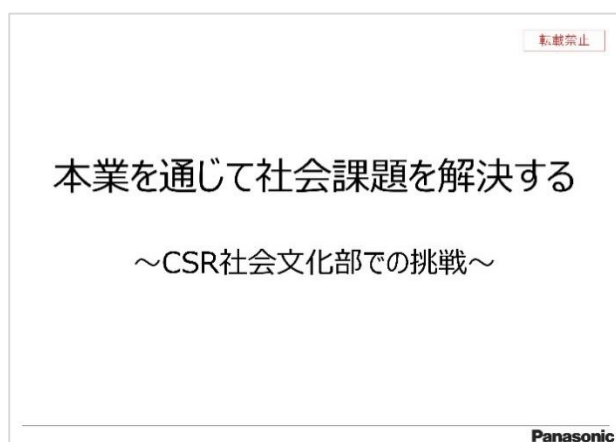


音の感性価値をビジネスに取り入れるためには、自分自身の受容性を開き、感性を鍛え上げる必要があります。音は空気の振動ですから、時間と共に消えていく、まさに変化の連続です。その変化をとらえ、ダイナミックレンジを大きくして脳を喜ばせて感性の感度を高くしなければなりません。音楽はやはりサステナブルウェルビーイングを実現する最もパワフルな存在の一つだと私は信じています。個性豊かで、多様な価値を抱擁し、感じることでつながり合い、人生を変えるほどのパワーがあります。それを私は自分のバックボーンとして大切にしています。

した。



2014 年にテクニクスブランドが復活し、このような私のキャリアの変遷から気づいたこととは、やはり人生の幸せという普遍的な価値にたどり着くためには、自分自身の感性の感度を高め、人と社会に貢献する志(こころざし)、これを常に拠り所にしないといけないということです。



ここから CSR 社会文化部での挑戦になります。本業を通じて社会課題を解決することを私のミッションにしました。その時、

私がすごく残念に思ったのは、本当に企業は見えないところで数多くの良い事を行っている。しかし日本の企業は陰徳という文化からか、謙虚に隠してきた。しかしちょうど私が担当した頃から北米や欧州の企業が CSR を強く言い出し、それは何だろうと紐解くと日本企業が昔からやってきた社会貢献であり、それをうまく本業で活かしていくことができてなかったのだと思いました。例えば、従業員も社会のいろいろな課題を解決するボランティアを行います、ボランティアへあまり声を大にして参加するのは会社へ言いにくいとか、会社の仕事と縁を切ってやるとかでした。これではいけないということで、本業と社会課題の解決をもっと近づけようとチャレンジを始めました。

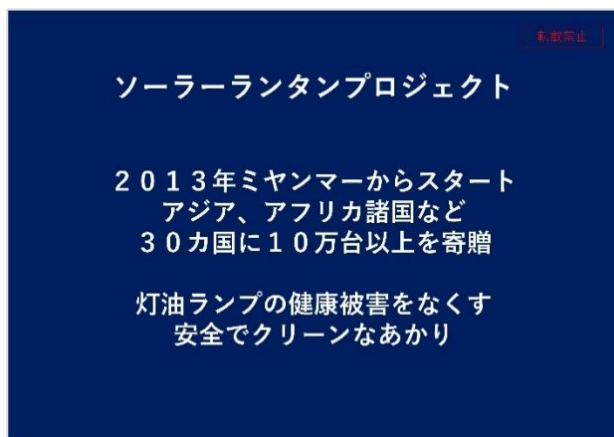


万博も SDGs 万博と言われています。人口爆発や食料・エネルギー不足の深刻化など、これからの未来を明るくしたいのですが、いろいろな課題が山積しています。



私が CSR の担当をしていた時は、まだ SDGs という言葉は無く MDGs(ミレニアムディベロップメントゴール)でした。それが SDGs に進化して今回も万博につながり、今の若い人たちには SDGs が当たり前で、企業が社会的価値を生み出して

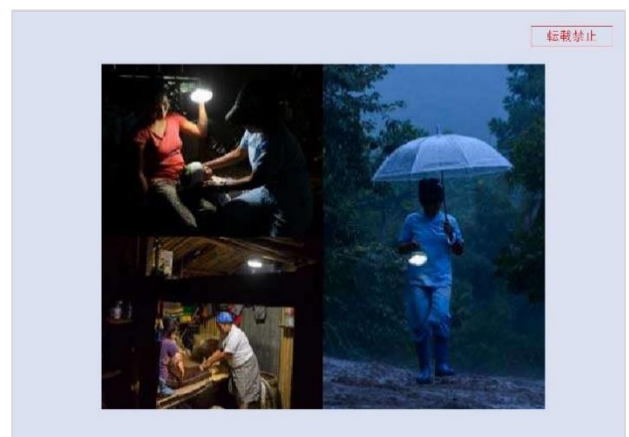
なければ就職しませんというような時代になってきました。



私たちも本業として、電気の会社ですので無電化地域にソリューションを提供して、その地域の人たちの貧困脱却やクオリティオブライフを向上できないかということで、ソーラーランタンプロジェクトを始めました。2013年にミャンマーからスタートして、主にアジア、アフリカ諸国で行いました。ちょうど2018年にパナソニックの創業100周年という節目がありましたので、2018年までに10万台のソーラーランタンを無電化地域へ入れる計画をたて、30カ国へ10万台を届けることができました。無電化地域ではケロシンランプという灯油のランプが使われており、煤で健康被害がありました。そういう健康被害をなくし、安全でクリーンな明かりを届けて人々の生活を豊かにさせようと、取り組みました。



これがミャンマー、カンボジアにおける医療現場の写真です。夜間の出産や診療に、真っ暗闇の中ケロシンランプ1つで診療されており、とても危険な医療活動です。ミャンマーで今も活動されているジャパンハート創設者の吉岡秀人先生と一緒に、私たちのソーラーランタンを医療現場で使っていただく協働もしました。実際にミャンマーを訪れていろいろお話しし、本当に助かりますと言って現場で使っていただいています。



出産もそうですし、夜間にお医者さんや看護師さんが暗い道を歩いて訪問診療される場合もあります。そういった時にもこのソーラーランタンが夜道を照らすことで、非常に役立っているということもお聞きしています。



このソーラーランタンの明かりの中で生まれてきた赤ちゃんを抱いている看護師さんたちが、本当に嬉しそうに写真を撮らせていただきました。



こちらの写真もカンボジアですが、アンコールワットの遺跡のある村です。とても貧しい村で、大勢家族がいて、子供たちは小学校を途中で辞めて父母の仕事を手伝わなければならない。そういった貧困化から脱却できない負のループがあり、そういうところへ例えばこのソーラーランタンで夜間に勉強ができるようになれば、もっと学力が付き進学もできるようになり、そうすれば貧困からの脱却にも貢献できる。そこで、こういった村々に NGO・NPO の皆さんと一緒にソーラーランタンを届けました。まさに NGO・NPO と協働できたことが、私たち企業にとって大変有意義なことでした。皆さんは、現場でどのようにこのランタンが使われているかをモニタリングしていただき、レポートもいただけます。何故協働できたかという、実は 1995 年の阪神淡路大震災の時にパナソニックの大阪本社が神戸に近かったということもあり、すぐに駆けつけていろんな災害支援をさせていただきました。ちょうどその後からボランティアの方々が

手を携えて NPO を立ち上げられたとのことで、その NPO の組織基盤を強化するためのサポートファンドを立ち上げました。活動に対して寄付をするのではなく、その組織基盤を強化すれば組織の活動が持続可能になるということで、環境、次世代育成、福祉の 3 分野でファンドを立ち上げました。もう 30 年近く経ちますが、その NPO サポートファンドの活動が、この度フイランソロピー大賞を受賞したとのことで、一時期私も担当しましたのでとても嬉しく思っています。



こちらは、女性の自立に関する活動の様子です。私も実際に訪れて、右上の写真は女性たちが日本の中古ミシンを使って縫製の作業をしています。しかし無電化地域で手元がとても暗く、女性たちがいくら頑張ってもとても歩留まりが悪く、例えば日本のように品質基準が厳しいところへ持って行っても落とされてしまい、なかなか収入に結びつかない。そこで手元を明るく照らしてあげることで、素晴らしい縫製ができ、品質の高い雑貨がいろいろできるようになりました。女性たちの収入もアップして、皆さん喜んでくれています。

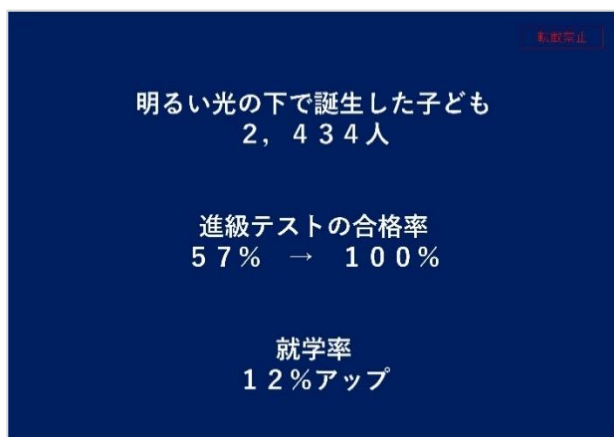


こちらは教育関係です。右側がカンボジアの識字率を向上

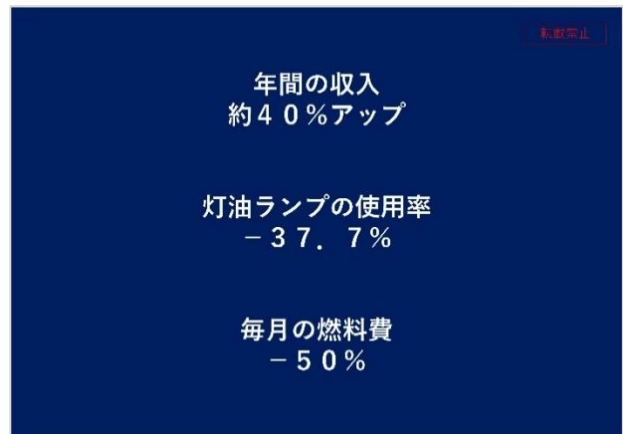
するための夜間学校、左側がミャンマーの寺子屋です。寺子屋での教育活動は有名ですが、こういったところでも役立っています。下の左側ですが、インドでナイトビレッジに行きました。真っ暗闇で子供たちがワーワー走り回っているのです。けれどもそこへこのランタンを持っていくと、子どもたちがウワッと寄ってきて、夜でも勉強ができると言って、これは勉強している時の写真です。インドはテストの成績が良ければいい学校へ進学できる制度があり、貧困から脱却できる。母親は子供たちに学力をつけさせたいが暗闇の夜で勉強させられなかったことが、この光一つで生き生きと夜遅くまで勉強できるようになりました。



その他ラオスとかフィリピンとかいろんなアジアの各国にこのソーラーランタンを届けてまいりました。



NPO・NGO さんと協働して、どのように改善されたかを数字で出しました。明るい光の下で誕生した子どもが 2434 人、進級テストの合格率が 100%になり、就学率も 12%アップしました。



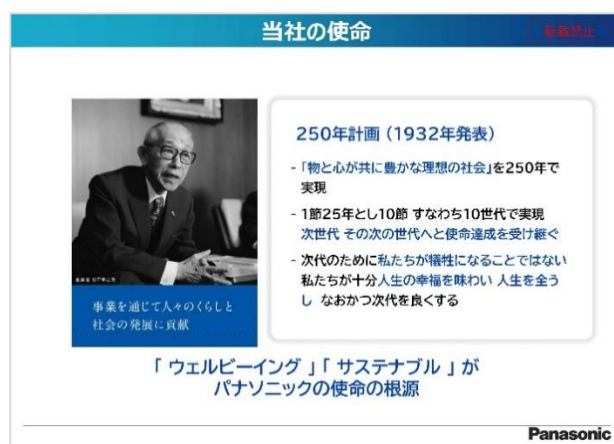
年間収入も 40%アップし、そしてケロシンランプ、灯油ランプの使用率がマイナス 37.7%になり、毎月の燃料費もマイナス 50%になったということです。



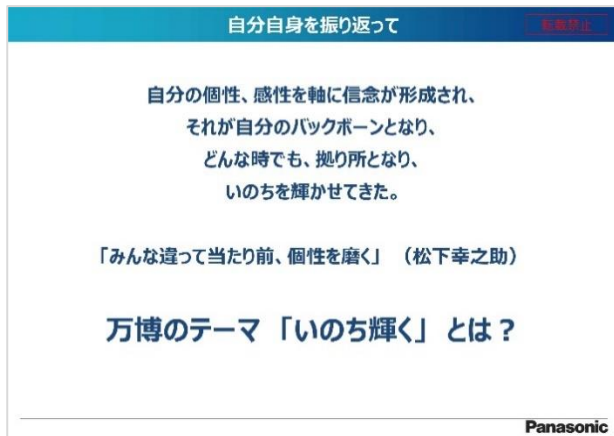
このソーラーランタンがご縁になり、この右の写真は 2018 年 11 月 23 日に万博誘致の最終プレゼンターで私がソーラーランタンを掲げて貧困や環境保全を解決する場にしたいスピーチをしている時の記事です。まさか自分のやった仕事こうやって万博誘致の最終プレゼンターとして役立つなど夢にも思っていなかったのですが、本当にいろんなご縁が繋がっているとつくづく感じています。



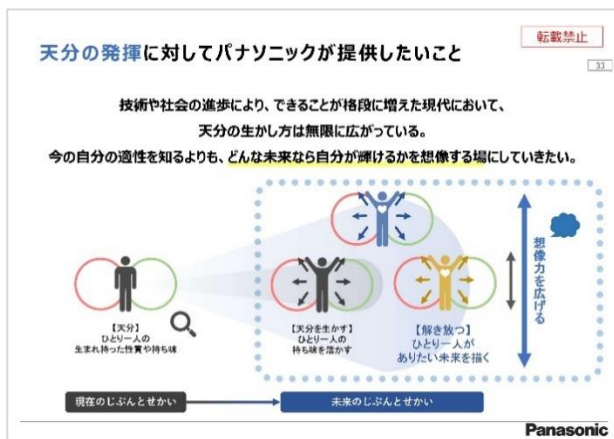
実は当時私は万博の「ば」の字も知らず、誘致活動がされている事すら知りませんでした。内閣官房の谷口智彦参与から、「最後のプレゼンターとして関西企業の女性で SDGs のスピーチができる人は小川さんしか残っていないのですよ」と頼まれました。私も大阪生まれ大阪育ちであり、大阪 LOVE ということで貢献したいという気持ちになり「分かりました」とお返事すると、「ではついでにピアノも弾いてください」ということになりました。とても嬉しそうに笑いながら弾いていますが、実はとても過酷な環境だったのです。後ろに大きなスクリーンがあり安倍元総理のメッセージ映像が流れたり、世界各国の子供たちが「What a Wonderful World」を歌う映像が流されるので、自分のピアノと歌をそれに合わせてくださいと言われたのです。演奏のきっかけのタイミングが合わなければ台無しになるので、前日のリハーサルできっかけのタイミングを wi-fi を使って知らせてもらおうとしましたが、wi-fi が飛ばないことが分かり、仕方なく私は本番前日に徹夜でそのタイミングを体で覚え込みました。明け方の空が白々とした頃に、徹夜して頑張ったことで様々な感情が湧き出し、1970 年万博の当時小学校低学年のキラキラ輝くような記憶が思い浮かび、あの時もやはり大人が頑張ってくれたのだから今度は私が頑張らなければと何故か涙が溢れてきて、そのモチベーションのまま会場に行きスピーチをしてピアノを弾きました。結果として本当に良かったと思います。



ここから大阪関西万博に向けてという最後のパートになります。実は 1932 年にパナソニック創業者の松下幸之助が 250 年計画というものを発表しています。この時に「物と心が共に豊かな理想の社会」を 250 年で実現すると言っております。1 節を 25 年として 10 節、すなわち 10 世代でこの理想の社会を実現する。次世代その次の世代へと使命の達成を受け継いでいくのだと。しかしながら、次世代のために自分たちが犠牲になるのではなく、自分たちが十分人生の幸福を味わい人生を全うして、かつ次世代を良くしていくことがこの 250 年計画であるとなりました。そして事業を通じて人々の暮らしと社会の発展に貢献することが経営理念なのですが、今の言葉で言えばこれは「サステナブル」「ウェルビーイング」であり、やはりこれがパナソニックの使命の根源であることを改めて認識しているところです。万博パナソニックパビリオンを建てることを決めて、そのコンセプトを紐解いていくうちに、私たちのこの 250 年計画「物と心が共に豊かな理想の社会」を実現するためのサポート、それも次世代のためにサポートしながら自分たちも幸せを味わう、そういうことができればいいと思っています。



そして自分自身も 36 年間パナソニックでいろいろなことをやってきましたが、やはり自分の個性とか感性を軸に自分自身の信念が形成され、それが自分のバックボーンになり、どんな辛い時でもそれが拠り所になって自分自身の命を輝かせてきたと思っています。松下幸之助自身も、みんな違って当たり前だ、個性を磨くことが大切だという言葉を残しています。

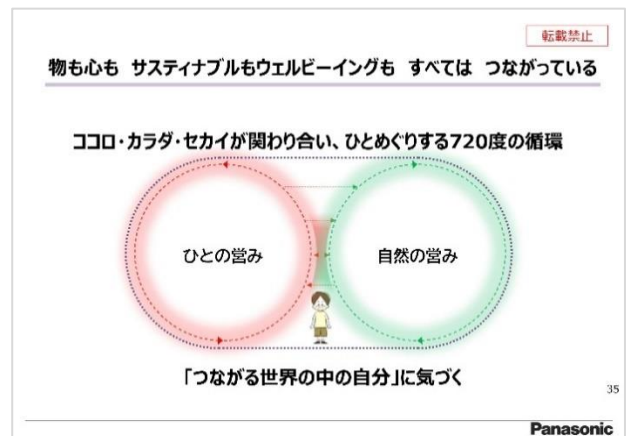


そういうことを真面目に議論した結果、万博のテーマ「いのち輝く」というのは、「天分を発揮する」ことではないかということに行き着きました。「天分を発揮する」というのは、松下幸之助の言葉に残っています。この「天分を発揮する」ということを、どのように表せばいいのか、パビリオンで 30 分から 1 時間体験するだけでできるだろうかというところから始めました。今は技術や社会の進歩で、できることが格段に増えています。天分の活かし方、例えば現在の自分で考えると、天分とは一人一人の生まれ持った性質や持ち味、特性と考えることができます。しかし未来に自分を輝かせる、天分を活かすとは、ひとり一人の持ち味を未来で活かすことではないかとして、今の自分の適性を知ることよりも、どんな未来であれば自分が輝けるかを

想像する場にしていきたい、そのためには一人一人がいろいろな未来を描けるように自分自身の感性や感覚を解き放ち、私たちのパビリオンではそういったことを体験価値として提供できないだろうかと考えたわけです。



この左側は、今まで私たちが普通に常識的にやってきたことです。パナソニックもお客様に「モノ」をお届けして、お客様との対話の中で、自分と自分以外という風に分けて考えていました。そうすると、なぜか自分の周りにいろいろな社会課題が山積していて、あれも課題、これも課題、全て解決しなければいけないことばかりになり、未来が暗くなりディストピアになってしまう。それではいけないということで、ワンネスということが言えないだろうか。全てがつながっている。自分も世界も全てがつながっていて、そしてこの自分の中にワンネスという意識が生まれないか。ということで、自分というのは凄い自分であり、自分の本分に目覚めてとても明るい未来を描くことができるのではないかという、このような考え方へパラダイムシフトしたいと思っています。



私たちパビリオンのコンセプトは「物も心もサステナブルもウ

エルピーイングもすべてはつながる」というようなものにしたいということで、人の営みも自然の営みもぐるぐる巡り巡って720度の循環で全部つなげる。



つながる世界の中での自分ということに気づけば、先ほど申し上げた解決を考えさせるということよりも、さらにその先の解き放つという、世界のポジティブな未来につながるのではないか。これが本来の天分であり、これを発揮していけるという、「解決から解き放つ」へのパラダイムシフトを生み出していけないだろうか。ここで「WOW」というようなワクワクするような価値を提供できないかということです。



先ほど、物も心も豊かな理想の社会を実現するというふうに申し上げました。この物というのはこれまで自分と自分以外の物という外の世界を見ていましたが、これからはワンネスで内の世界を見るということで「物」をひっくり返して「ノモ」というふうにして「ノモの国」。これを内面世界の冒険・子供たちの冒険ということで、「解き放て。ここからだとせいかい」というメッセージで子供たちに体験していただく、そういう風な構成で考えています。



そして、この「ノモの国」というのは主にアルファ世代をターゲットとした内面世界の冒険です。ここで心と体と自分と世界を解き放っていくということなのですが、その「ノモの国」を出てもう一つの「大地」というスペースを作り、そこは今パナソニックが少し先の未来を考えながらいろいろな技術を開発しています。子供たちも一緒になって共創していく、未来のための技術ということです。1970 年万博の頃は本当に科学技術の祭典のような感じで、尖った技術や凄い技術が沢山ありましたが、今回の万博はやはり世界規模の社会課題をみんながつながりながら解決していくという、定義自体も変わっています。そういう

ことから、パナソニックも子供たちと共創していく、そういう風な未来、これを一人一人の子供たちの天分が発揮できて、想像力が発揮できるような抱擁できる大地という、大地の受け止めによっておおらかな世界を描けるようなスペースを設計しています。

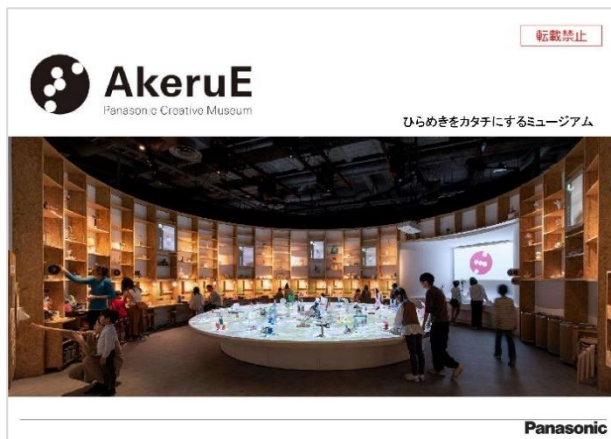


これは本当に一例ですが、この大地で描こうとしている未来の姿です。人間拡張で自然を傷つけずに人の能力や営みを広げる。ここでもロボティクスとか AI とも入ってきます。将棋の藤井さんは AI を使い自分の能力を拡張されているそういった世界、あるいはバイオダイバーシティで微小な生物たちと助け合う。もうマクロの宇宙からミクロの生物まで、全部が繋がっているという、そのような大きなおおらかな感覚になればいいなと思います。そして、エネルギーの問題がありますので、この自然の余剰エネルギーを人の営みに活かす。先ほど 720 度の循環と言いますがそのようなことであったり、オーガニックマテリアル、こういったところをサイバー・フィジカルでうまくナラティブにストーリー仕立てするような姿を今描いています。

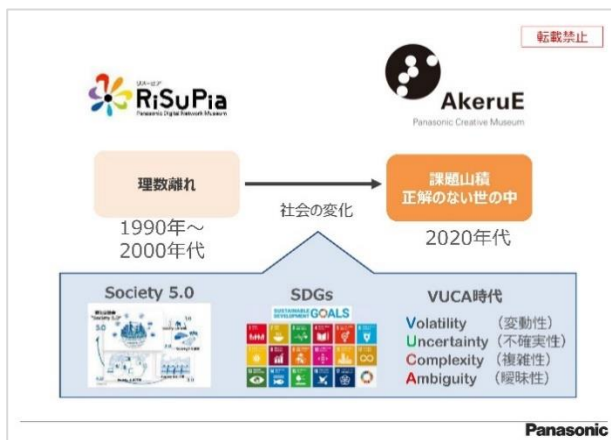


一つの例として、ペロブスカイト太陽電池、今軽量・高効率

でいろいろな所へ設置できるということで、社会実装が進んでいます。これを例えば葉っぱみたいにして、地表の植物や微生物にもその木漏れ日が届くように、且つ人にもエネルギーがもたらされるような明るい技術にできないかというようなことも考えています。



最後に、私たちはパナソニックセンター東京として、有明に AkeruE (アケルエ) という子供向けのミュージアムを展開しています。実はこの母体となるミュージアムは RiSuPia (リスピーア) と言いまして、理科と数学を楽しく学べるミュージアムです。



20 年以上やってきていますが、それを少し進化させました。実はこのリスピーアからアケルエという課題山積で正解のない世の中へ社会が大きく変化していますので、このアケルエという場所で STEAM 教育をベースに活動しています。STEAM (Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics)、実はこれが、私が新入社員の時に目指していたサイエンスとアートを融合するという、それを体現したものでもあります。このアートというのは芸術だけではなく、いわゆるリベラルアーツ(一般教養)、歴史だとか人文科学も含みます。私は自然科学と人文科学は接点をもっと必要で、そういうところからこれからのイノベーションは創出されると思っています。STEAM、今までは STEM と言われていましたが、“A”が入ってこれが今の世界の潮流になり、嬉しいなと思っています。

万博の考え方のごく一部をご紹介させていただきましたが、機会がございましたらもう少し詳しい話ができる日が来るのではないかと考えております。ご清聴ありがとうございました。

(終了)



このアケルエで、実は万博の共創活動をしています。今は社員の皆さんと行っており、やはりパビリオンの「DEI (Diversity, Equity & Inclusion)」をみんなで考えたい、建築や体験、運営面などそれぞれの側面から誰もが安心して楽しめる命輝く未来社会のデザイン、こういうふうなことをやりたいと思っています。まず始めているのが、聴覚障害の方々と子どもたちが、各々の違いを楽しみながら体験できるような展示コンテンツがあればいいということで、社員との共創の中でいろいろなアイデアを生み出しています。そのアイデアをもとにパビリオンにも実装していきたいと思っています。これは去年の12月そして今年の2月に実施し、約100名が参加してくれています。車椅子の方でも楽しめるようなパビリオンとはどのようなものか、ユニバーサルデザインということで以前からやってきてはいますが、今はそれをもっと拡張して DEI という観点で共創活動を始めているところです。